

## 平成29年度 第1回ひきこもり支援等検討委員会 会議録

■日 時：平成29年5月11日（木）10：00～11：30

■場 所：総社市総合福祉センター 2階 教養研修室

### ■参加者

【委員】山本 繁（総社市福祉委員協議会）・阿部 久仁子（総社市地域自立支援協議会）・西田 和弘（総社市生活困窮支援センター協議会）・中山 遼（NPO法人 あかね）・藤井 基弘（藤井クリニック）・平野 悦子（総社市保健福祉部）・内田 和弘（総社市保健福祉部 健康医療課）・新谷 秀樹（総社市保健福祉部 福祉課）・北川 和美（総社市教育委員会 学校教育課）・三上 啓子（教育支援センター）・渡邊 節夫（総社市教育委員会 生涯学習課）・田頭 羊子（岡山県備中保健所）・大崎 雅也（倉敷中央公共職業安定所 総社出張所）・佐野 裕二（総社市社会福祉協議会）

※ 欠席（安本 美喜男・林 直方・周防 美智子・直島 克樹）

【オブザーバー】吉田 光臣（岡山県社会福祉協議会 地域福祉部）

【事務局】横田 優子（総社市保健福祉部 福祉課）・中井 俊雄・佐々木 恵・高瀬 智早（総社市社会福祉協議会 ひきこもり支援センター）  
(敬称略)

### ■開 会：平野保健福祉部長 あいさつ

平成27年度から社会福祉協議会で着手してきた「ひきこもり」支援の検討は、「権利擁護センター」、「生活困窮支援センター」が関わる高齢の両親とひきこもりの子どものケース等で、ひきこもりが社会問題であるということから始まった。私自身も地域に出ている頃、ひきこもりの相談を受けることがあったが、何もできずそのままになっていた。今もそのままの状態であれば、ぜひ「ひきこもり支援センター」につながってほしいと思う。穏やかな高齢者の暮らしの保障や社会の損失解消にもなる。ひきこもっている方の多くは、本当は外に出たいと思っていると聞いた。その中の一人でも多くの方が出ることができれば、社会的にもとても価値のあることであり、ご本人自身も出たいという気持ちを実現できたら素晴らしいことだと思う。総社市では全国屈指福祉会議でとりあげることになり、市の事業でもある。二年間の取り組みでは、地域の民生委員や福祉委員がキャッチした207名という数字が出ている。きっと207名より多いと推測される。これからひきこもりの方へ声をかけることが出来たらと思う。

### ■委嘱状の交付

### ■自己紹介（名簿順に自己紹介）

### ■委員長の選任及び副委員長の指名について

・委員長（西田 和弘） ・副委員長（平野 悦子）

## ■報告事項

### ●報告書（未定稿）について

- ◆ 31ページから「ひきこもりサポーター養成講座」、33ページから「ひきこもりからつながる地域づくりフォーラム」を追記している。
- ◆ 1ページ目「はじめに」について、西田委員長にお願いしている。内容については、西田委員長に一任いただきたい。

### ●ひきこもり支援センター「ワンタッチ」の実績について

- ◆ 4月11日の開所以降、新規相談受付件数17件、延べ相談支援件数85件、1件当たりの相談回数は5回。内訳は3、4ページの初回相談状況を参照。毎週1回訪問しているケース、毎日メールでやり取りしているケースもある。新規17件の内、4件は市外からのケース。岡山市1件、倉敷市1件、玉野市2件。家庭訪問は6件。就労支援施設の見学への同行訪問は3件。
- ◆ 4月は関係機関とのネットワーク構築を主に行った。岡山県保健福祉部健康推進課、県民生活部男女共同参画青少年課、備中保健所、ひきこもり地域支援センター、岡山県社会福祉協議会、ハローワーク総社、総社市教育支援センター、フリースペースあかね、KHJきびの会、ひきこもり支援センターくらしき等。
- ◆ 4月21日に総社市教育委員会センター協議会へ、4月25日に生活困窮支援センター支援調整会議へ出席。
- ◆ 健康医療課からのケース1件、生活困窮支援センター・基幹相談支援センターとの連携ケース4件。
- ◆ ケース会議への出席7件。
- ◆ ひきこもりサポーター定例ミーティングを4月28日に開催。毎月1回開催予定。
- ◆ 5月8日までに21件の新規相談を受け付けている。訪問した時にすぐに会える方もいるが、全く会えない方もいる。

### ●関係取組みについての情報提供

#### ・備中保健所（田頭委員）

- ◆ ひきこもり地域支援センターの紹介。4月に県の精神保健福祉センター内に設置。支援コーディネーター2名。電話、来所での相談。これから、地域とのネットワーク作りや、専門研修をしていく。
- ◆ 4月の実績（対象は岡山市以外）。電話相談の延べ件数52件、実件数37件。報道を見ての相談がほとんど。来所5名。性別は男性が多い。年齢は40代が11名、20代が12名。ご家族や同居ではない親族からの相談が多い。
- ◆ 岡山市以外の全域が対象のため、訪問支援は難しい状況。各地域とのネットワーク構築の必要がある。総社市との連携方法を検討したい。保健所をとおすのか、センター同士が直接やり取りをするのか。

#### ・総社市教育委員会センター（北川委員）

- ◆ 「ふれあい教室（適応指導教室）」を「教育支援センター」に名称変更。適応指導

教室だけでなく、ひきこもり予防対策事業も含めてセンターとしての役割を果たすため。

- ◆ ひきこもり予防は不登校対策と同義だと捉えている。各学校でも不登校対策を行っている。ふれあい教室に来れず、各学校でも十分に支援できていないケースを派遣登校支援員が担う。また、総社市全体の不登校の実像を把握し分析していく。(平野委員) 今までは、「ふれあい教室」と呼んでいたものが、「教育支援センター」になるという認識でいいか。
- (北川委員) ふれあい教室自体は名称として残るが、枠組みとしては教育支援センターの中に入る。

## ■協議事項

### ●平成29年度 事業計画(案)について

- ① ひきこもり支援センター「ワンタッチ」の設置運営(新規)
- ② ひきこもり支援等検討委員会
  - ・課題別WGの開催日程、所属委員は次回の検討委員会までに検討。
- ③ ひきこもりサポーター養成講座
  - ・前年度までは備中保健所の予算で実施していた。今年度からは総社市の予算になるが、引き続き保健所と連携して開催する。
- ④ ひきこもりサポーターフォローアップ研修(新規)
  - ・昨年、登録したサポーターが対象。定例ミーティングは4月28日(金)に開催。次回は5月18日(木)
- ⑤ ピアサポーター養成講座(新規)
  - (佐野委員)今の段階で、養成講座の対象になり得る相談者はいるか。
  - (佐々木)14番の方は調理師の免許を持っている。就労の前にボランティアなどをしたいと思っている。居場所で一緒にご飯を作るといった活躍の仕方があると思う。6番の方は障がいがあるが、漫画やアニメが好きなので一緒に漫画を描くなどの活躍の仕方があるのでは。
  - (藤井委員)言葉の質問。ひきこもりサポーター養成講座、ひきこもりサポーターフォローアップ研修、ピアサポーター養成講座の違いが分かりにくい。
  - (中井)各項目の説明。一般市民の方に分かりやすいような名称で、広報の際には工夫したい。
  - (藤井委員)当事者の方に案内をするときに、最初の取っ掛かりでつまずいてしまわないように配慮する必要がある。
  - (西田委員長)特にピアサポーターという名称は市民の方には馴染みがない。実際に実施する際には工夫をするという前提で進めていく。
- ⑥ 居場所の設置、運営(新規)
  - ・当面は、固定の場所を借り上げるのではなく、公共の施設を借りてボランティアスペースでサロンのようなイメージでの実施を想定。
  - (中山委員)16年前に不登校の居場所が乱立した時期があった。岡山市内で20ヶ所できたが、現在残っているのは「あかね」のみ。ひきこもり支援で大事な

のは継続性。資金面だけでなく、支援者が変わらないことも。ひきこもりサポーターの方がいかに長く続けられるかのサポートも必要。場所ではなく、そこに誰がいるかが居場所の本質。

(西田委員長) 完全に無償のボランティアだけで運営するのは難しい。社協が受託したのは継続性を前提としている。立ち消えることがないように、「あかね」のノウハウを教えてもらいながら運営していく。

⑦ ひきこもり家族会の組織化（新規）

(佐野委員) 現在、保健所の方で家族会の取り組みがされていると思うが、総社で家族会をするようになった時の関係性はどのようになっていくか。

(田頭委員) 今現在は、家族会があるというよりは家族の学習会がある。その中に家族会を立ちあげたいという思いをもっている人がいる。組織化という部分に関しては、ご家族の方の気持ちもある。

⑧ ひきこもり支援センター開設記念シンポジウム（仮称）の実施（新規）

・7/23（日）13：30～基調講演は池上正樹氏に依頼。場所は、3階大会議室

●スケジュール（案）について

- ・状況によっては修正していく。
- ・（案）を消し、委員会として了承。

●新規の事業の提案

(新谷委員) 委託元の市としての立場としての案だが、まだまだPRができていないので、上半期はPR中心でいき、広報誌などでひきこもりの特集記事などを考えている。紙面の都合上、どこまで実現できるかは分からない。「ひきこもり」という単語に対する「怠け者」「わがまま」「病気」誤解をといていくような内容にしていきたい。そういう部分を支援等検討委員会で協議していきたい。市民の方にわかりやすい言葉で伝えていきたい。

(西田委員長) センターを立ち上げた初年度、周知啓発活動は大変重要である。⑨ということでもかまわないので、「周知啓発活動」ということで盛り込み、内容や方法という部分に関しては次回委員会でセンターとして発信していく作業が必要。方法論を次回、委員会で提案する。

●ひきこもり支援センター開設記念フォーラム（仮称）の実施について

ジャーナリストの池上正樹氏が基調講演、西田委員長より今までの取り組みについて経過報告した後、分科会（ワークショップ）を開くという形式。

【質疑応答】

(西田委員長) 分科会は誰が担当するかという具体的なイメージはあるか。

(中井) 当事者からの発信、支援者に求められるもの、居場所を考えるもの、情報発信（SNS・新聞）を考えるものの4点を考えている。学識経験の方や実際に取り組みをされている方等を想定。なお、周防委員は当日オープンキャンパスと重なっているために欠席。委員会の委員の中から分科会の取り仕切りをしていただけるような分科会を目指し

てと考えている。

(西田委員長) 分科会のテーマの設定はこのままでいいのだろうか。

(平野副委員長) 第4分科会(情報発信)はどんなイメージかがわからない。

(中井) 情報発信は、発信だけでなく、受信も含めてだと思ふ。例えば10番の事例などは、毎日メールのやりとりを見ていると、ゲームやアニメなどで特殊性の高い内容である。インターネットの世界でのウエイトが大きく占めており、特に若い世代の中ではオンラインゲームやチャットなどの独自の世界があると感じる。若い世代をターゲットにした取り組みが考えられないだろうかと思っている。付け加えて、就学後が対象だが、18番のケースは12歳が対象になっている。なかなか教育支援センターにも行くことができず、直島委員のところに関わりができていたが、ぜひひきこもり支援センターにつなげたい、就学期ではあるが、ぜひお願いしたいと相談されている。その方もアニメやゲームの世界でしかコミュニケーションがとりにくい様子がある。そういった世界に秀でた方の話をワークショップで聞くことができても良いのかなと思ふ想定した。

(平野副委員長) ひきこもりとちょっと離れてしまっていて、そのSNSなどの仕組みを知るみたいなイメージにとれる。

(中山委員) 特殊な分野でしかやりとりができない子たちは、ほとんどが実際そうである。漫画やゲームなどで、なかなかついていけないことが多い。特殊な分野でしか会話が成立していない子どもが多いので、そういう分野をどう受け付けられるかが最初の鍵である。他県のNPOの支援者の面接の段階で「ONE PIECE」を全巻(今現在、82巻)が課題とかあるぐらい。漫画やゲームが一番最初の入り口としては大きく、ここにこ生放送で居場所を作っている方もいる。若い世代のメディアや情報から彼らが入りやすいところであると感じる。メディアや彼らの発信をどう受け取るかどちらかという受信の方が強いのかなと感じる。分科会で話してどう結果を得るのか難しいかなとも思う。これはどちらかという当事者やピアサポーターという部分が強いかなと感じる。実際、当事者の方はオンラインゲームをしてきた方が多いので、「それ分かるよ」「それ面白いよな」といった話ができるのは当事者の強みである。当事者からの発信というのが大事であると思ふ。当事者からの発信の中にサブで入っても良いのかなとも思う。

(西田委員長) 僕もそう思う。

(中井) 異文化のところなのでどう組み立てていいのかがわからない。

(平野副委員長) そういったところを勉強するという部分はわかる。ひきこもっている人たちの現状、私たちは単に声をかけてあなたのことを思っているよみたいな、そんなものではない、この子たちはこんな世界に生きているよということは私たちは本当に知っていないので、知るという意味では良いかなと思ふが、情報発信を考えるとといわれると・・・。

(西田委員長) 当事者からの発信というところを複数あってもよいのではないか。ゲームや漫画の話をも本人の口からしてもらっても良いのではないか。そういう糸口もあるのかと参加者が感じることができればよいのではないか。各分科会の人数はどのようにイメージしているのか。

(中井) テーマごとにメリハリがあるので、大会議室は300弱、実際は200名を想定。技能習得室、教養研修室、大会議室、保健センターの4部屋を確保している。教養研修室はちょっと小さな当事者の方が話せるクローズな場面にしてみたり、大会議室は大き

なテーマで大きな話をしてもらったり、会場規模に合わせたようなやり方を考えなければと思っている。平均的に、一つは約50人。

(平野副委員長) 第一分科会(当事者からの発信)に人気が殺到しそう。その方の声を聴きたい人がたくさんいそう。

(西田委員長) 4つ分科会を絶対作らないといけないのか。3つでも良いのではないか。就労もあってもよいのではないか。生活困窮と合同であるようなイメージも良いのではないか。第一案としては、分科会を3つにする。第二案は、なにかしら働くということイメージした分科会はどうか。

(佐野委員) 就労に結びついたり、ボランティアに結びついた成功事例も知っていただいて、就労に関するものもあって良いかも。

(西田委員長) それでは、第4分科会は就労に関するものに内容変更ということで記念フォーラム実施。

## ■その他

(事務局) 次回は、7月下旬を予定。委員長・副委員長で日程がとれる日で後日日程調整。分科会については個別に相談。

(藤井委員) チラシをひきこもりの方の家族の相談で紹介したら、「ひきこもり」という言葉が胸にこたえる。世の中の「ひきこもり」という言葉はこの言葉しかないのか。

(中山委員) 色々な団体とこのテーマで話すこともあり、当事者の手にチラシが渡った時、自分がひきこもりだと思ってまずは辛い気持ちになる。ただ、ひきこもりという言葉を使わないと、ひきこもりの人になかなか届きづらいジレンマがある。団体によって様々で、使わずに「生きづらさを抱える青少年や若者」という言葉でおさえるところもある。こういうチラシがむしろ本人ではなく、支援者や地域や家族に渡るように工夫される方もいる。そのすみわけ、当事者に積極的にどんどん渡すのであれば言葉をかえた方が良いのかなとも思う。関係機関に配布するのであれば、このチラシの方がわかりやすいと思う。

(西田委員長) 準備段階でもいろいろ議論があった。最終的にこの言葉でいこうという話になった。

(藤井委員) あまり最初は気にならなかったが、ご家族から言われてそうかもなと思った。

(平野副委員長) 議会でも議員から反対意見も出た。先ほど中山委員も言われたように「ひきこもり」とわからないとやはり相談先もわからないだろうという思い。当事者がショックで相談に行きたくないと思えば、検討の余地があると思うが、誰がみてもそんなことやっているところだとわかってもらわなければならない。最終的には仮の名前がついていても、対象者はひきこもりの方となれば同じかなという気もする。通称は「ワンタッチ」がついた。説明しないとわからない。

(西田委員長) 言葉の使い方は難しく、例えば「精神科」ってどうなんだという意見すらできる。それだと先にすすめない。当たり障りのない名称に変えると逆にニーズがある人にキャッチできない。当たり障りのない名称に変えると「社会参加支援センター」とすればなんの当たり障りがない。それだと我々が本当にやろうとしていることができるのかということできない。周知啓発活動を通して抵抗をなくして、「ワンタッチ」するし、していただくという形にできればと思う。今のところはこれで進もう。

## ■閉会：あいさつ